益田市の歴史文化の特色（全7回）

第5回　益田氏と雪舟が作りあげた「中世文化の薫るまち」

【問い合わせ先】
市文化財課　☎31-0623

今から800～400年前の益田では、領主益田氏が幕府や周辺の大名からも重視される活躍を見せ、その遺産が現在も益田には息づいています。

益田氏の居館三宅御土居と居城七尾城の遺跡はそろって良好な状態で残り、あわせて益田氏城館跡として史跡に指定されています。益田地区には、当時、益田氏の城下が広がり、現在もその名残を多くとどめています。重要文化財の万福寺本堂、染羽天石勝神社本殿をはじめ、医光寺総門などのゆかりの寺社の建造物、また当時の町割りも色濃く残っています。

そして特筆すべきは、室町時代のみならず日本の文化史を代表する画僧・雪舟との関わりです。室町時代の益田氏当主兼堯は、雪舟を益田に招き、雪舟は兼堯の肖像画を描き、また庭園を築いたといい、それが重要文化財の益田兼堯像であり、史跡および名勝の万福寺庭園と医光寺庭園です。この2つの庭園は山口市の常栄寺庭園、福岡県添田町の旧亀石坊庭園とともに「雪舟四大庭園」と呼ばれています。

紙本墨書益田兼堯像
（雪舟筆。重要文化財）

また、益田市内には、中世の時代の山城や古文書、仏像・神像が数多く残っており、益田氏だけではない、中世益田の多面的な様相も次第に明らかになってきています。鎌倉時代の益田氏は東仙道を本拠としていたと考えられており、実際に東仙道土居遺跡からは南北朝時代の石塔群が発見されました。高津川下流域には荘園長野庄が成立し、横田町や本俣賀町のあたりには内田氏とその一族俣賀氏が、安富町のあたりには安富氏が割拠し、ゆかりの寺社や古文書が残っています。

このほか、古文書では、「紙本墨書原屋家文書」、「梅津文書」、「原馨氏所蔵増野家文書」、「妙義寺文書」「萬福寺文書」など、全国的に見ても貴重な古文書が残ります。山城では、市史跡の横山城跡、向横田城跡、碁盤嶽城跡、小松尾城跡、叶松城跡、道川城跡、四ツ山城跡、丸茂城跡をはじめとして約90の山城跡が各地に残ります。